



か
し

秋

北

月



二條家御中興

俳諧之百韻

あまふもそとあまの松平一様有月太

まゝおぼはるめあめり 下五

曉臺

おゆりふいふ成をいひの及て

泰台

卯の中さふ森あけまらこ

日居

名の波音ゆ入してふる折音よ

士朗

耳はあめらさふ仙の色

萬岱

なまふのけよ能書取致しころ

羅城

善まうかうきりのれりてれとや

明拳

木の根垣さくすありの様ゆり

絃六



今ハむかしの酒れ 大寺

明ぬる子錢鑄るをそりそる

先不そを月れ佩心

梅うまよと度あけつる小盃

雨露あしき浅尺の芹

聲かすしを山をうし月うこ

ぬーハまもせせし差すあり

中宿のまてをーぬし根ぬー

ゆさうを甲乙をの路

初縁をの共りし伊勢

あろ人ーしし他ろつや

志れ陸小うれ陸ひ修あし

のれ推考る土まれ小吹

扶実の頂れ古家まをうれ

脊り白れ志の旭うけ

海荒掃の路れ加城城をく是

あろろとろしと意ろ注連

凡し吹めろををしとろし

一里ハこな河野 一族

何夜の蕙毛の路ハ養

あやめしとろしと意ろ

あろろとろしと意ろ

毛條

素外

芦涇

嵐月

明美

陶河

昆明

仙兒

蓬洲

之楓

規風

排曉

吳井

墨山

怡泉

麟路

于當

辨二

大阜

帯櫻

淇水

素兒

心はくーのゆき

桃里

傘よ敷のーらるる

五周

不山をさこりこ

不木

兼かき連の飄れ飛の拂

百池

舞しすしきしき

大寂

孝倒よみのり

卧史

雨苔いふか我

訓

宋戸の嶺もや

臺

そのほろろーの峰

城

山崎よ宗澄うか

六

八播れ防のて

六

我のあき

拳

我のをさ

外

あふくもく

條

こくい

月

撰流ー人

涯

こり

阿

吃あ

居

若殿

児

龍

羨

り

机

牛

明

春鬼可成こやト ころり
秋とていそは神こり ころり
岸京りつや せ 室の舟
木具の垂よ 憂^{おも}きしり 訓
柚の系 ぞくく せ せ せ せ
笔とりて せ せ せ せ せ せ
何ぞ せ せ せ せ せ せ
海のせ せ せ せ せ せ
袴のせ せ せ せ せ せ
羽の月 せ せ せ せ せ せ
雲うつ せ せ せ せ せ せ
抱のせ せ せ せ せ せ
春らく せ せ せ せ せ せ
海つ せ せ せ せ せ せ
雲のせ せ せ せ せ せ
春う せ せ せ せ せ せ
月附 せ せ せ せ せ せ
海つ せ せ せ せ せ せ

睡 川 山 風 浜 井 二 泉 杉 阜 兄 高 月 水 池 寂 臺 里 春 木 松 洲

母あしきしつをほりけ
 家の丸木のまのし馨し
 海をここのりしきき
 鶺鴒まはれものししゆれお
 玉座たつ内とほろし
 かく有しよと具あるは
 靱し人し涙ふれし
 棚で焚火たきつ花よくりけ
 空しきかきめ八重の山草
 流波はよむきし君みれや
 国よまししそまはる人
 月をそよ風の夜光ころへ吹
 おくしきりし冬の丸日
 散ちかれしききみ動あはれ
 人しきき聲しききしき
 拾ひあけてくれハゆくの色帯
 さしきしきききききき
 蒼きよふ不二の光りのきりし
 雲一しきのきききき
 糸眼しきききききき
 笑れて亦まのきき
 折くけしききききき

峯 升 條 城 屋 六 美 之 以 可 列
 賦 凡 思 楓 井 泉 山 高 岳 阜 橋

水
信あり心やまゝの日は余り
洋うくつ沖國 美う
池

右

宗通
丸子
口
口
主事
香元
曉菴
臥史
五周
百池
明峯
怡泉

寛政二庚戌十月十六日興行

了川一極てえれハ弁山の濃紅系太

月一れよそれ 古道 青蘿

廣以
五齡
玉屑
唱因
宗居
化責
梅舎
松溪
宇牛
冷茶
章古
廣以
五齡
玉屑
唱因
宗居
化責
梅舎
松溪
宇牛
冷茶
章古

不二のりやうとまふく入ふひけ

何年し彼の鳥をまふく猿のこ

あつと廊下の紙好れこ

入くま中の月の氣き

とて近し川葉の初鞋

扱くまぬを露と消よけり

瑞世あつと物まのい皮

序をけりまゆしあつと次系あつと

くれしとくまの羽印

小魚と浅砂川の波うり

秘魅鬼の傍のふるり

焼火のうけあやしとくまの清

名をしと室事成流しと免

幕をけり此の報をまゆと

ねの旭よいのと吹あれ

西のるまをけりまの尾

舞く焚粥の炎をまゆ

とて川五更の凡のあつと

あつとけりあつと入れ

呪よとくまのあつと

晴蛉近よ子の能よ哉

見よとて盃のちとまの月

岩若

桜年

五粟

桃睡

東團

まよ

爪涼

布舟

まろ

右契

着裁

洗洲

淇筍

法露

蘭玉

五竹

秋の

明琴

臥更

百池

残る異し川うやあ
か几ののまき屋に命ぬ笑うよ
凡の流るる屏れおけり
結のちれ新端も危ぬくし
まありけぬく青のうの
おれせとて夢後悲けり
いよははらうてそ花魁はすよ
浪白のらるるまはてしうのり
月らく雁三じ二じ
公のくもてまきまられ秋
次やうよ裕志初れ夕暮る

伊勢の後の蛇一ト 芭

大夏の花よらうくまそ
苗代まき山の下りく
牛の子の肝つねもむら
昔屋の成成以きくさ
虚を信の細く籠むれて
木はれ情初休小
火う流りのまき屋に細竹を結
源一都よてん老の眼
夏ハまき池のあし
新樹をそくおれれ月

約はふはれが男大の能く
手おはさしれ入部定り
初享共沙^あく^あ移り^あカ
くも帰れ^あく^あ有京北
か^あく^あれ^あ生れ^あく^あ進^あり
渡^あり^あく^あく^あ今^あく^あ年
海^あも^あや^あ能^あく^あく^あ奉^あの^あく^あ
給^あく^あく^あ至^あく^あ奉^あり^あく^あ
移^あり^あく^あく^あく^あく^あく^あ
根^あく^あく^あく^あく^あく^あ
然^あく^あく^あく^あく^あく^あく^あ

笑の佛も汗やか^あく^あく^あ
於^あく^あく^あく^あく^あく^あく^あ
む^あく^あく^あく^あく^あく^あく^あ
あ^あく^あく^あく^あく^あく^あく^あ
山^あく^あく^あく^あく^あく^あく^あ
復^あく^あく^あく^あく^あく^あく^あ
隣^あく^あく^あく^あく^あく^あく^あ
れ^あく^あく^あく^あく^あく^あく^あ
白^あく^あく^あく^あく^あく^あく^あ
関^あく^あく^あく^あく^あく^あく^あ
娘^あく^あく^あく^あく^あく^あく^あ

石包じみの沢樹はあらさるに
~~~~~  
遠海子<sup>ル</sup>を凡虫の服<sup>ル</sup>くく  
海<sup>ル</sup>くをふる欄の上  
玉養<sup>ル</sup>か碎<sup>ル</sup>小<sup>ル</sup>馬<sup>ル</sup>世<sup>ル</sup>書<sup>ル</sup>る  
枕の先子<sup>ル</sup>大<sup>ル</sup>積<sup>ル</sup>  
歎<sup>ル</sup>陣<sup>ル</sup>然<sup>ル</sup>れりて  
島根の雲<sup>ル</sup>霧<sup>ル</sup>をく  
百<sup>ル</sup>牧<sup>ル</sup>丸<sup>ル</sup>彦<sup>ル</sup>交<sup>ル</sup>流<sup>ル</sup>す<sup>ル</sup>一<sup>ル</sup>納<sup>ル</sup>  
夕<sup>ル</sup>月<sup>ル</sup>かけて通<sup>ル</sup>る<sup>ル</sup>河<sup>ル</sup>川<sup>ル</sup>  
新<sup>ル</sup>海<sup>ル</sup>く露<sup>ル</sup>き<sup>ル</sup>く<sup>ル</sup>不<sup>ル</sup>程<sup>ル</sup>飄<sup>ル</sup>

た<sup>ル</sup>〜<sup>ル</sup>い<sup>ル</sup>〜<sup>ル</sup>か<sup>ル</sup>る<sup>ル</sup>  
脱<sup>ル</sup>のあ<sup>ル</sup>き<sup>ル</sup>い<sup>ル</sup>川<sup>ル</sup>く<sup>ル</sup>窓<sup>ル</sup>〜<sup>ル</sup>几<sup>ル</sup>  
色<sup>ル</sup>を<sup>ル</sup>ふ<sup>ル</sup>か<sup>ル</sup>く<sup>ル</sup>九<sup>ル</sup>十<sup>ル</sup>九<sup>ル</sup>の<sup>ル</sup>髪<sup>ル</sup>  
交<sup>ル</sup>息<sup>ル</sup>午<sup>ル</sup>痴<sup>ル</sup>以<sup>ル</sup>後<sup>ル</sup>欠<sup>ル</sup>れ<sup>ル</sup>を<sup>ル</sup>乞<sup>ル</sup>  
あ<sup>ル</sup>れ<sup>ル</sup>湊<sup>ル</sup>の<sup>ル</sup>出<sup>ル</sup>入<sup>ル</sup>不<sup>ル</sup>自<sup>ル</sup>由<sup>ル</sup>  
い<sup>ル</sup>〜<sup>ル</sup>小<sup>ル</sup>妻<sup>ル</sup>を<sup>ル</sup>鳴<sup>ル</sup>る<sup>ル</sup>  
休<sup>ル</sup>も<sup>ル</sup>く<sup>ル</sup>〜<sup>ル</sup>樽<sup>ル</sup>午<sup>ル</sup>毛<sup>ル</sup>纏<sup>ル</sup>  
世<sup>ル</sup>〜<sup>ル</sup>道<sup>ル</sup>程<sup>ル</sup>咲<sup>ル</sup>も<sup>ル</sup>不<sup>ル</sup>改<sup>ル</sup>〜<sup>ル</sup>中<sup>ル</sup>り  
皆<sup>ル</sup>〜<sup>ル</sup>海<sup>ル</sup>〜<sup>ル</sup>家<sup>ル</sup>あ<sup>ル</sup>め<sup>ル</sup>〜<sup>ル</sup>下<sup>ル</sup>料<sup>ル</sup>

吾

宗道青蘿  
執筆百池



口 臥吏

主事 以奉

番元 秋芳

寛政二庚戌十月十七日無事

除しのみ思ひに 至北走し不

をたらしむる 居のあけほの

りふの西の福しひ子切に叙有て

見才中一のたのりーさふり

千石不辱れる私を依しそ

もろかふひびく ねの上風

宿の暮月の面せり 暮あしん

泊る屋敷ら 行静ある 秋

風をく 泣のー 髪は打たはる

浅きこびこしむ 御薬

曉の五里はれ下雲しる

され養家凡店 園さやじ

矢四寺れ古き 端礼をよふしめ

概のいし木子 存あり川はる

はりくと運ぶ 昨の休遊身事

作の草花の 色残香 され

曾あし 是福を 既月と見候

利刀 糸れ 杖登 子あく あり



藤の子れあふ後し都り以收りぬる  
備れ駕もも纏と一し

此はしりるるりくふも咲 ちや

蝶折えしれ口をうり

扇子もし陽を統る舞のちや

まね藤素<sup>す</sup>至<sup>し</sup>海<sup>うみ</sup>もり

唐<sup>てい</sup>土<sup>ど</sup>画<sup>え</sup>作<sup>さ</sup>す復<sup>た</sup>以<sup>り</sup>書<sup>き</sup>せりれ

むふふれふ帆の垂<sup>た</sup>り

市<sup>いち</sup>北<sup>きた</sup>日<sup>ひ</sup>以<sup>り</sup>言<sup>い</sup>傳<sup>は</sup>せ<sup>り</sup>こ<sup>こ</sup>家<sup>や</sup>す

百<sup>ひゃく</sup>千<sup>せん</sup>るる<sup>る</sup>と<sup>と</sup>わ<sup>わ</sup>そ<sup>そ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>

美<sup>み</sup>麗<sup>れい</sup>ふ<sup>ふ</sup>人<sup>ひと</sup>を<sup>を</sup>お<sup>お</sup>夕<sup>ゆふ</sup>祈<sup>いの</sup>る<sup>る</sup>す

木<sup>き</sup>る<sup>る</sup>れ<sup>れ</sup>子<sup>こ</sup>巻<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>り

古<sup>こ</sup>橋<sup>はし</sup>祀<sup>まつ</sup>る<sup>る</sup>て<sup>て</sup>竿<sup>はし</sup>子<sup>こ</sup>折<sup>お</sup>り<sup>り</sup>

祢<sup>ね</sup>子<sup>こ</sup>村<sup>むら</sup>板<sup>いた</sup>の<sup>の</sup>細<sup>こ</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>ひ<sup>ひ</sup>し

郭<sup>かく</sup>云<sup>い</sup>れ<sup>れ</sup>あ<sup>あ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>る<sup>る</sup>月<sup>つき</sup>晴<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>ぬ

う<sup>う</sup>れ<sup>れ</sup>子<sup>こ</sup>い<sup>い</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>る<sup>る</sup>お<sup>お</sup>密<sup>ひそ</sup>に<sup>に</sup>刻<sup>き</sup>を

棟<sup>むね</sup>上<sup>かみ</sup>れ<sup>れ</sup>餅<sup>もち</sup>入<sup>い</sup>れ<sup>れ</sup>詰<sup>つ</sup>合<sup>あ</sup>て

俗<sup>しやく</sup>厄<sup>やく</sup>よ<sup>よ</sup>あ<sup>あ</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>知<sup>し</sup>る<sup>る</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>有<sup>あ</sup>

う<sup>う</sup>や<sup>や</sup>む<sup>む</sup>や<sup>や</sup>の<sup>の</sup>園<sup>えん</sup>れ<sup>れ</sup>遊<sup>あそ</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>何<sup>なに</sup>列<sup>れつ</sup>て

紙<sup>し</sup>屑<sup>くず</sup>糸<sup>いと</sup>の<sup>の</sup>肌<sup>はだ</sup>子<sup>こ</sup>落<sup>お</sup>ち<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>敷<sup>敷</sup>

名<sup>な</sup>子<sup>こ</sup>多<sup>た</sup>て<sup>て</sup>る<sup>る</sup>姿<sup>すがた</sup>れ<sup>れ</sup>虫<sup>むし</sup>の<sup>の</sup>想<sup>おも</sup>ひ<sup>ひ</sup>て

人<sup>ひと</sup>薙<sup>ひ</sup>力<sup>ちから</sup>を<sup>を</sup>か<sup>か</sup>け<sup>け</sup>欄<sup>らん</sup>す



夕色にふまふあらしの松女ま店

人の中の一りけり花のうけ

今の世の古も正まふ沙汰のあま

滝タカ氣キ多タくク空カラををりりおれ

五月月あらしの記ころあらしを

初穂成りや神カミよよししりり

あらしや父の白麻シロマ敷敷きき玉タマ

さくさくさくさく二人あり

と盛れをうむけ動くまじ

沙サのの玉タマのの家イヘ成ナリ同トウきキすす

あらし子の花あらしのうら白シロ玉タマ

あらしのいとれいとれいとれ

所トコロ精セイ花ハナ地チををあらしあらし切キりりすす

あらしのいとれいとれいとれ

大勢の中オホセウチノナカにニ忍ニガヒ止トメすすてて敬ウヤマシ

緩ユルのの被カサのの幸サイ掛ケひひすすて

あらしのいとれいとれいとれ

あらしのいとれいとれいとれ

馬ウマ市シれれとと花ハナ吹フキ友トモれれ

あらしのいとれいとれいとれ

中ナカ名ナのの形カタ判ハジメれれとと追オヒううけけすす

あらしのいとれいとれいとれ



月くけふ卑子老成あしく  
雁村くしれとたふし野色  
秋れよ鬼子の極丈帆取て  
後志川くたれ仲津あはれ  
天竺の月益も名音千一  
孫をんやーしとれたんつぎ  
夫請せーよ一度の旅ひ千  
みせりよ時の梅子あけ打  
活する代ハ自ら凡とあ  
今更たへ夜ハ羽織さる  
その月後のかくれめ二十ヨリ

時物く小桐油ふああり  
板のらふ藤あ子玉子元花  
沭市共春の徒一う危  
千麻ふあくしきれむの山  
く川岸の蛇のらこし  
大紋よーし更ふんと去るれ  
熊よえの月くはれ始  
白紙はほしけし津の夕ありし  
陽くあふしあし  
昔暮れ宿も川さし其れ  
をたといくしあ



水乃成服鼻有とやこー歌  
女中既れ皺粧ひて  
西の目よ消まらる男 まじり 山  
寒くもえこーー一ふりの夜  
玉とあれあゝねく粧ひて  
産れーちーれ血手ぬ人  
あ代経る身と極れ度よ月の色  
る業をも入ー一ほれ柳ぬる  
昔れ秋ふらふと糸の糸をま  
月夜方よとよ 歌 並  
将門の御衣不傾粧ひらる

取ひて祈る次はら  
中元よ一灯の雲吹おこれ  
松ハのこーれ家よ核ふ  
もろれ皆集る 曙 子  
長みしーい を道の表

五

宗通 関文  
批筆 外史  
同 百地  
立事 明奉  
香見 秋止の



寛政三年正月

初沖懐紙之飛端

い肩よ千代櫻海らんねれ苗 曉老

妻れ老くく花よ緒るる太

馬刀岸小小浪くく妻海えそ 春古

くくの香をくく凡す糸くく 不木

かく半信如別くく蝶くく 又凡

情海くくく石れたれくく 共六

夕月よとちと並後れ序の色 桃唾

秋をかうくく敬詞くく 共成

也子酒の研わのくくくもて 東津

板生ひ茂る松ふれ家 芦涯

小多海新所くく馬代りおく 曉老

沖とく小蘆深れき思 北筆池

下果

寛政四年之妻

初沖懐紙之飛端

海みくく松らくく門の影ふ 蘭文

花多川くくく木鳴るる太

若駒の来の肩鞠妻あそて 廣明

凡情あくくく袖れをくく 桃唾

乙老ら人す川人れくく 野儀



水きりけりや 板はあや相 月峯

と月はほやきふ ちのこほをう 芦花

○ △ 引板し作しぬ秋うつ所能 如鏡

萩唐候きく 鏡見たり 玉屑

裏おとしき日ハ 酒のび 其成

高軒やうれおはれて 眼のさき 涼宇

れとみの刀かくし けり 白黛

恋衣くさきよ 深く深しけり 五芽

利根たきし 玉板板板 古福

松の戸の月ハ 涼しき 月居

板しと けり 百池

○ 公派ゆふ 小きけり 毛條

滲入る鳥居の内ハ 草のま 眉山

さし 蝦をとり 川汐れ 颯風

あつたふつみ けり 悪多れや 貞松

汗てしりし 白く 巴凌

半多れ 富士の石ハ 崖吹 一水

天多う けり ちと 其成

童もし 勝え 進く 白黛

任のかりし 秋ハ 不木

道斗く 寝柱のあき 月居

とらうが 麻れ あき 百池



右

宝通 関文  
執筆 百池  
主事 白黒

寛政六年丑三月

御初懐紙之他語

妻の松千代世氏君小吹也也

関文

御のとり小権の 認年

太

礎とらふ仇の海西目の照りて

恭古

赤う、瓦中をよせせし子葉

不木

来移ふる多しぬおと川凡し

芦涯

夜と隔て名香 漢羅人

嵐月

明鏡凡月の下ゆるるやあふれや

枕曉

△ 右

宝通 関文  
執筆 百池  
同 五芳

寛政六年癸丑春四月十日、奥の

他語し百韻

傳へ奉りて津波花千とを太

道ハ千里の妻れ去る陰

玉屑

ま名霞の雪解小魚と玉を

恭古

飛云さう宿ハおくハ只

蝸田

枕おと氏板の舟板跡人

古福

紙



飛ひの葉はを吹ふ散ちれぬ糸いと

唐から糸いとの穂ほのこと糸いとの秋あきの月つき

川かわ改かるるてそとそとなくね虫むし

肌はだきよき藤ふじもものの長ながとと白しろりり

あふみの人ひとがが別わかれれててきききき

及およびびめめれれたたりり改かるるててそそととなくねなくね

すすくくくくややううくく家いえにに草くさむむ

鴨鴨の子このの餌えももややととななれれてて鳴なるるささくく

星ほしささへへええつつぬぬ周しゅうれれああけけるるの

ととるる花はなくくとと護ご摩ま焚ふ洞どう之の堂どう

そそ性せいををああららしししし執しつのの足あしのの際ぎは

加か川かわちちののらら小こ袖そでをを露つゆもも投なげげてて

二ふた月つきののううれれきき山さん木ぼく

ああええてて花はないいれれ一ひと箱はこのの志こころのの心こころ

草くさ子こややうう首くびののおお打うちちししりり

家いえのの桃ももやや梅うめよよ里さと 笛ふえてて

白しろささててききのの列りゆうててききりり

夕ゆふ日ひののああいい幽ゆう子こ打うちちたたみみ

ああらららられれたた友とも成なりららししれれんん 眩くらむむ

馬うま士しののああららしし人ひとをを隠かくれれんん

名なののつつきき高たかくく茂さからら花はな草くさ

ああららししれれんん 腹はら通とほるる 名なのの流ながりり

涼すず宇う

月つき君きみ

栞しやく堂どう

如ごと鏡きやう

五ご凌りやう

眉まゆ紅こう

五ご曇どん

月つき坡は

晚ばん眉まゆ

五ご風ふう

其その的てき

五ご粟ぼ

八はち款くわん

東とう團だん

右みぎ香かう

布ふ丹たん

章しょう古こ

岩いわ苔こけ

梅うめ色いろ

化くわ麦まい

古こ瓢ひょう

梅うめ玉たま



板——海峽諸子ありしれ  
 木菴の禪杖高徒のう——こて  
 化多のれ机逆さう——泡多の  
 立のうくれま方ハ夜るの交りきり  
 月之の亭子月もそさうや  
 醉舞系海北研乃ら海の腸病て  
 一狐のま果織そ——  
 泊船北岸もまき加多月九津  
 日和房乃ら法埋貝の聲  
 世とよせしありし小孫村のす  
 傍正坊れたとさ——  
 終

五州  
 花蕉  
 至峯  
 涼亭  
 不木  
 机里  
 其成  
 白鯨  
 五芽  
 純燦

あれ紅のむつ——と打呉て  
 其ハ白をさし川との 衣  
 月彦記牛四入下小石の堂  
 翠れれさし屋子も反初巻  
 夏軍一のうきとせきしぬまの巻  
 既小百里北張り杖曳く  
 連枝——とさ——のうきまおん巻  
 凡のささふりん—— 龍  
 船の心不故焚煙打ふふひさ  
 八せしとそれの能さうさる  
 らん板と幕のむの巻は——



瀨を尾しり着科一の尾  
新よの聲 晩のそ暮日のそ  
家夢かみく神もくそ  
垢離水を定る思れ 測るそ  
こそれ 嘆きれむの 隠者  
み林の中も高麗西片 埃  
靴羊あやう ぬれ若法よこ  
思雲れ 碑きてこし 凡早し  
又も 坊成み 行れかけぬ  
千坂千 湖と 汲て ちか  
白雨晴れ 思ふこ 日 衣中

山 蟬 其 声 さ さ さ さ さ 庭 の 山  
こ 枝 の 礼 山 衣 衣 心  
こ 秋 凡 寂 一 お 初 の 衣 内  
る 象 比 香 山 人 盃 子 川 衣 衣  
志 ね 一 敵 び ま 討 ね 心  
団 共 小 只 名 衣 衣 衣 衣 衣  
こ 雨 川 渡 千 流 衣 衣 衣 衣  
雨 丸 の 光 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣  
特 て 岩 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣  
卯 の 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣



あやしと氣の儘に消し  
素振しと池のふえきり  
竹をわく成あはら  
松の乳子赤の山好あし  
まは折成通し  
松の事概く十月  
妹の言ふとわら陽  
草餅北香平一保れ  
再此色うい流作只  
四つは小新後  
霞のつとれ大時中

とくと鶴千六るむ  
あまは浦子  
落しおれ佳方と急  
入十の小判  
市女多ん市田  
月籠つとま  
おら月江才  
般たる島  
名よつと野  
おれ松の  
家産や



浦

浦經千股成る今一凡之潮

折果一弓矢とい川う朽ぬあり

今ハ流も海も池も

代理ハ其ハ心成カるハ形相

四万五千里ハ千倍後ハあり

むの袖子の雲升ハ翻

松も柳も幾千代ハら

右

宗通 玉屑

筆 百池

筆 五芳

寛政六年癸巳四月二十日

正凡宗作一頁忘能請令終牙

先冬永是後更一所

次行香者乳前直香徳再拜

次之御代拜

次宗通是為序氣前したる

次下文亮 主事ハ一重堂ハ中央  
向乳字

次下人ハ之懐紙也次進之

主事取重重文亮ハ其向文下向乳前

自上首月

次百講作



次各承為序

次講之

各三五以下此為先讀名号之時  
其人平仗

次講作送序

次主事取文卷而退

次司香者進而行者

次主事九別之文卷重之 鍾離

次執詠使者各序其前 右懷州詠

次讀作送序

次執詠使取印懷紙之禮作

次讀之 文各平仗

次主人進序作有所懷紙之

次退亦自下各序

天別制

中具正式百韻無所

或況如恒例但於最末講書之

主人 重厚 宗道

司代香 蘭文

執詠使 月君

掌事 玉有

讀作 外史

簽作 石編

同 涼亭



講作  
執筆  
書不又芳  
主事  
久松白黛  
執次  
田中其成



